

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

ローカル・プライドとナショナル・プライドの緊張関係： 北海道の心臓移植を例に

早稲田大学大学院 政治学研究科 博士後期課程
小久保亜早子

要旨

北海道の心臓移植の例から、ローカル・プライドとナショナル・プライドの関係性について考察した。

中央集権構造の日本で北海道は劣位におかれていたが、中央への対立、開拓 100 周年、札幌オリンピック計画などを通して北海道の人々はローカル・アイデンティティをもつようになっていた。1968 年、世界で 30 例目に行われた日本初の心臓移植は、当初は、高度な医学水準に達したとしてナショナル・プライドを高め、かつ北海道の人々のローカル・プライドを高めた。しかし、刑事告発など批判が高まりナショナルな承認を失っていく。ただし中央と対立していた北海道では、ナショナルな承認を失ったからといってただちにローカル・プライドではなくなるとは限らなかった。

キーワード：ローカル・プライド、北海道、心臓移植

1 問題設定

ローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティはどのような関係にあるのか。ローカル・アイデンティティはナショナル・アイデンティティに従属するのだろうか、対立することはないのだろうか。北海道で行われた日本初の心臓移植を例に考察する。

日本では 1968 年、心臓移植が世界で 30 例目に行われているが、これを最初は日本全体で称賛していた。たとえば北海タイムスの『心臓移植：和田グループの記録』の巻頭には厚生大臣園田直の称賛がある。「この手術は日本の医学水準の高さを内外にしめた」（北海タイムス社編 1968, 序文）。しかしその後、悪いイメージが定着し、あ

る人々からは日本の臓器移植が遅れた原因として忌避されている。しかし当時の現場の北海道での印象は必ずしも同じではない。そのギャップからは北海道と中央の間のさまざまな感情を読み取ることができる。

日本初の心臓移植は、1968年8月8日、札幌医科大学胸部外科、和田寿郎教授らによって行われた。レシピエントは進行した連合弁膜症に心房細動をくりかえす心不全を伴った18才男性である。ドナーは溺水後に蘇生術が不成功に終わった男性であった(和田ら 1968a)。術後、一時的でも、レシピエントは経口摂取可能となり、車椅子移動もできていたが、結局、術後83日で死亡した(10月29日)。83日間の生存は、当時の他の心臓移植例と比較して決して短くはなかったものの、レシピエント死亡後はこの手術への批判が高まり、ついに1969年2月、和田は刑事告発される¹。ドナーとレシピエントについての殺人の疑いである。起訴するかどうかの決定において主要な問題点とされたのは、ドナーの死の判定と心臓移植の適応の当否である。和田は手術後、死の判定には脳波を使用したと述べていたが²、刑事告発によって後日、その脳波を紙で記録しておらず、客観的根拠がないことが明らかになった³。結局、専門家3人の鑑定を経て、最終的に不起訴が決定された。

革新的外科手術は論争を呼ぶことがあるが、当時日本社会の関心が高かったこの手術は、医療関係者だけでなく社会を含めて論争になった。当初は称賛であった評価が、手術に関するさまざまな疑念が表出し、肯定的評価は大きく逆に振れるようになる。後述のように、地元北海道では一度はローカル・プライドを高めたと感じることができた手術であったが、全国的評価が下がったときに北海道の人々はどう受け止めたのか。即座にその評価を全国と同様に逆方向に転換したのだろうか。もし、ローカル・プライドがナショナル・プライドから産出されたものなら、全国的な評価と同様に下げることになるであろう。しかしそれは中央と対立しているときでもそうなのだろうか。本稿では、北海道の心臓移植の例から、ローカル・プライドとナショナル・プライドの関係性について考察する。

¹ 告発したのは漢方医たちで、西洋医学への警告を目的としていた(北海タイムス 1969年2月15日夕刊、「和田教授を告発：殺人容疑の成立は困難」)。

² 『朝日新聞』1968年8月9日朝刊、「心臓移植ついに踏切る」

³ 多くの資料では「脳波は測定されなかった」と結論づけられている。

2 分析枠組み

2.1 ナショナル・アイデンティティとローカル・アイデンティティ

本研究では「ローカル・アイデンティティ」という概念を使用するが、これについてはさまざまな解釈があり、かつ概念そのものもあいまいである。「ローカル・アイデンティティ」は近年、「地域再生」や「まちづくり」の文脈で使用されているが、ナショナル・アイデンティティほど定義についての議論がされていない。たとえば大堀は、個人が感じる地域の特性、地域への帰属意識のような個人レベルのローカル・アイデンティティは、地域の歴史や文化などを背景に形成されるもので、集合レベルのローカル・アイデンティティは「地域関係者の多くが共有している要素」と定義している(大堀 2010)。ここでは「個人レベル」のローカル・アイデンティティに焦点をあて、特に人と人との間をつなぐ機能的側面に着目する。

ローカル・アイデンティティは、決してナショナル・アイデンティティの縮小版ではないが、ここではローカル・アイデンティティをナショナル・アイデンティティの定義から援用して定義することにする。人々はまとまって共生するための帰属意識をもとうとする。たとえば、植民地だった地域の住民が国民国家を形成するときは、共有する歴史があることを強調し共通の帰属意識をもとうとする(アンダーソン 2007, 274-310)。社会集団が自分たち同士を確認するとき、その確認作業の過程において人々の共属感情が形成される。そこで「われわれ」とは何かという存在論的な問いに政治的な要素を提供するのが「ナショナル・アイデンティティ」である(中谷 2000)。「ナショナル・アイデンティティ」の機能とは、国民一人ひとりが彼らの属する共同体から承認されたいと望み、承認を感じさせることにあるという(中谷 2003, 12)。単純化するならば、ナショナル・アイデンティティの機能は二次元的である。個人と政治的共同体の間という垂直方向と、個人との間の水平方向の二次元で機能する。「個人＝市民と共同体の関係が二重の意識状態にある。政治的共同体への帰属意識と個々の市民の連帯感情につながる共属意識という二重の意識状態である(中谷 2003, 13)」。垂直方向の機能は「社会的な差異をめぐる相互の関連性を国民的な統合という権力作用に収斂させ、国家への帰属意識、すなわち忠誠の調達と一体性の確保へと編成する(中谷 2003, 18)」ことである。そのときこの帰属意識を補強するものは「ナショナルなもの」を基盤とする共属感情である。歴史性・民族性や伝統・集団の記憶など共通の文化的土壌から住民相互信頼や共属意識が育成される(中谷 2003, 12)。イデオロギーとしてのナショナル・アイデンティティは

主に国民統合のための言説であり、広く国家への帰属意識の強化を図るためにナショナルな感情に訴えることを目的とする。つまり、政治的シンボルをつうじて国家への忠誠を調達するための政治の様式であるという(中谷 2003, 18)。

ローカル・アイデンティティもナショナル・アイデンティティと同様にその機能は二次元的であることが想像できる。国民国家では国家政府と国民が分裂することがあるように、地方でも地域の人々⁴と地方政府が分裂することはある。分裂しているとき国家政府が国民の心を束ねようとして、ナショナル・アイデンティティを創出しようとするように、地方政府もローカル・アイデンティティを創出しようとするだろう。後述する「開拓精神」はこの機能を狙ったイデオロギーといえるだろう。ただし国家の次元と違って、地方政府の権力は限定的であるためローカル・アイデンティティの垂直的な機能はナショナル・アイデンティティほど強くはない。

水平的機能(共属意識)については、地域の人々が互いに共通の感覚をもてる対象、特にその地域独特なものならなおさら、その対象を通じて地域の人々は互いに絆、一体感をもつことができる。典型例は史跡やスポーツ・チームである。アンダーソンはボルブドール遺跡がインドネシア人にとってナショナル・アイデンティティとなっていることを指摘しているが、ある地域にとって重要な史跡やスポーツ・チームはローカル・アイデンティティをもたらせる。さらに故郷は感情を揺さぶる。居住の土地には特別親密な思いを持つことから、水平的機能はローカルなものの方が強い。

また、ナショナルな対象物とは差別化できるからこそローカル・アイデンティティになるのだが、この場合対象物を通じてナショナル・アイデンティティと対立的関係になることがある。Armstrong はノルウェーのフットボール・チームに向ける人々の思いをアイデンティティの視点から分析し、ベルゲンに住む人々のローカル・アイデンティティがノルウェー人としてのナショナル・アイデンティティとは分裂していることを論述している。両アイデンティティはアンビバレントであり、時に対立的ですらある(Armstrong 2003)。水平的機能(共属意識)においては排他性が含まれるため、ローカルにより愛着を持つことは、ナショナルには心理的に距離が発生することを示唆している。

⁴ ローカル・アイデンティティをもてる人々は法制度上の「道民」とは限らないので、「道民」という表現よりも、ローカル・アイデンティティをもてる人々として、「地域の人々」と表現する。

2.2 ローカル・プライドとナショナル・プライド

ローカル・プライドもナショナル・プライドから援用する。自国が世界一のことを成し遂げたときや、世界初のことを成し遂げたときなどに、国民として国家を誇れる感情を抱くが、本稿では、この国家を誇れる感情をナショナル・プライドと定義することにする。田辺によると、人々は、ネイションに対する誇りや威信を政治的なものと文化的なものという異なる二つの次元でとらえているという。すなわち、「世界への影響力」や「軍事力」など対外的な面に誇りを抱くのが政治的なナショナル・プライドで、「文学芸術」や「科学技術」、「スポーツ」など文化的分野に誇りを抱くのが文化的ナショナル・プライドである（田辺 2010, 86-9）。心臓移植のような先進的な外科技術を早くも世界で30例目に行ったことは、日本国民に科学技術についてのナショナル・プライドを持たせたであろう。また、ナショナル・プライドとナショナル・アイデンティティの関係についてだが、前者は後者の要素であると考えている。

ローカル・プライド⁵も同様に考えることができる。地域が日本一、あるいは日本初のことを成し遂げたときや、日本に歴史的に大きな影響を与えた偉人に、地域の人々は地域を誇れる感情を抱くが、本研究では、この地域を誇れる感情をローカル・プライドと定義することにする。ローカル・プライドはローカル・アイデンティティの一要素である。歴史的な地域であれば、史跡や歴史的偉人は地域の人々にローカル・プライドをもたらせることで地域の人々の共属意識を高める（ローカル・アイデンティティ）。

国民国家の構成員(国民)であれば、個人はローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの両者どちらも持っている。アイデンティティを感じられる対象がローカルなものであると同時にナショナルなものである場合がある。例えば坂本龍馬は高知のローカル・ヒーローであるのと同時に日本のナショナル・ヒーローである。ここには必然的に矛盾がある。ローカル・アイデンティティは排他的であるのに、ナショナルなものになると、地域の人々にとって自分たちだけの大事なものではなくなってしまうからである。ローカル・アイデンティティはローカルな共属性をもたらす機能があったはずなのに、国家から承認されるなどしてナショナル・アイデンティティを感じる

⁵ 似たような概念として「シビック・プライド」がある。この概念について伊藤が整理しているが、都市環境と結び付けられている使い方が多いという(伊藤 2017)。本稿では、「共属意識」に主眼をおくので、質的に差異があると考えられる。

よくなると、その瞬間からそのローカルな共属性をもたらす機能が損なわれるという矛盾である(図 1)。これはコミットメントをめぐる「普遍主義と特殊主義のジレンマ」と似ている。幅広い人々を社会に包摂するためには、価値や表象を普遍化しなければならないが、その分、その制度を支えるために必要な人々のコミットメントの程度は低まらざるをえない。逆に、コミットメントの形式を特殊化するとその程度は強まるのに対し、そこに含まれる人々の範囲が制限され、深刻な排除が生じる(安達智史 2010)。

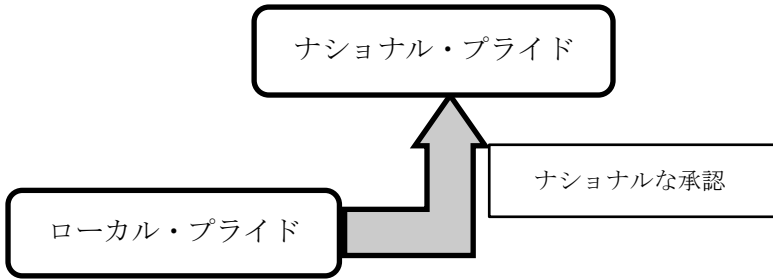


図 1 ローカル・プライドがナショナル・プライドになった場合

もし水平的な機能が残るとしたら、国家に承認されたからローカル・プライドをもてるというような、間接的なローカル・アイデンティティになるのではないだろうか。例えばオリンピックで金メダルを獲った後に地域の県民栄誉賞をとる選手がいるが、ナショナル・プライドを高めたからローカル・プライドを高めた、捉え直したと考えることができる(図 2)。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

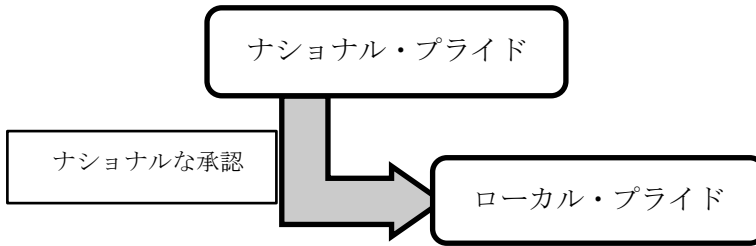


図 2 ナショナル・プライドがローカル・プライドになった場合(間接的なローカル・プライド)

ただし、この状況が成り立つには地域と中央が統合されているような、少なくとも対立していない条件が必要であろう。もし地域と中央が対立しているときはどうなるのだろうか。

本稿では、北海道の心臓移植が一度はこの状況になったにもかかわらず、全国的な評価が下がったとき、北海道の人々がローカル・プライドをどう処理したのかを考察する。

3 先行研究と方法

北海道に限らずローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの関係性に関する研究で筆者の関心に近い研究としては、前述した安達⁶のブリティッシュネスに関するナショナル・アイデンティティとサブナショナル・アイデンティティの関係を論じたものや、前述した **Armstrong** の研究があるが、本稿で扱う時代の日本はイギリスやノルウェーよりも中央集権体制が強固であり、かつ民族的にもほぼ均質化されているので、条件の違いという点で本研究の独自性を見い出せる。また、日本のローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの関係性に言及した研究として、近代の福岡に関する研究(**Ogawa 2013**)があるが、両アイデンティティのアンビバレントな性質については考察されていない。さらに北海道のアイデンティティに関する研究は、

⁶ この研究では、統合されていない地域と、中央の関係において、アンビバレントなアイデンティティが考察されている。

アイヌ民族に関するもの⁷が散見されるものの、一般的な北海道民に関するアイデンティティの研究は、後述している映画に関するものなど限定的である。ましてナショナル・アイデンティティとの関係性についての考察は、渉猟しえた範囲では本稿が最初の研究と思われる。

研究材料は心臓移植が行われた1968年から70年ころまでの新聞や自伝、医学雑誌などである。筆者は「中央」を、国家政府や国民国家の中心的存在の意味として使用する。後述する引用文の文脈では、全国、東京なども含まれているが、特に注釈していない。また、この手術が論争的であったことを前提として議論するが、紙幅に限りがあるので詳細については専門書に譲ることにしてこの手術に関する論述は省略する。この手術の正当性は別として、北海道の人々がどう感じたのかに焦点を当て考察することにする。

4 北海道アイデンティティの基盤

4.1 共通の歴史や共通の文化の欠如

北海道は日本の都道府県のなかでもっとも広く、本州とは海峡で隔てられて地理的に独立している。北海道社会は、先住民以外には日本の他地域からの移民で形成されており、1869年から開拓され、当時はまだ100年余りとその歴史は浅い。明治19年(1886)から大正11年(1936)までの37年間に、北海道に移住した戸数は総計551,648戸で、その範囲は全国各府県に及ぶ。『北海道移民政策史』によると、とくに東北および北陸からの移住者が全体の3分の2近くを占めて多かったという。村落社会の形成過程はきわめて多様で、笹森によると、大まかに7種類の成立過程があるという。偶発的な村落形成、旧藩主あるいは士族が中心となって開拓に従事し村落を形成したもの、府県の団体移住により自作小農を中心とした開拓で村落を形成したもの、会社などの農業経営による開発で農業小作人によって村落が形成されたもの、屯田兵村の設定による開拓で、はじめから計画的に村落が形成されたもの、などである。開拓当時の移住民の生活は、母村での生活様式をそのまま導入していたが、北海道の厳しい自然条件との対決(自然的葛藤)や、開拓地隣人との間のトラブルに対処するため(文化的葛藤)に変化していったという(笹森 1987、71-4)。

⁷ たとえば(小内・長田 2012)や(野崎 2012)である。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

北海道は大量の人口流入と流出を二度経験している。開拓時代の移民流入の規模は大きかったが、戦後も大きかったのである。1886年の北海道庁の設置以降、1920年ころまで約5年ごとにほぼ20万人前後が転入した。しかしこれ以降、終戦にかけては、転出が増え自然人口増分を上回る。それが大戦後は一変、5年間で約30万人もの転入という、開拓期を上回る人口増を経験する。日本が植民地を失ったこと、大量の復員と戦災罹災者、失業者への対策からの必要性であった（奥田 1998、377）。しかし1955年以後、日本の高度経済成長に照応して、これまで労働力の受け入れ地だった北海道は、他の地方と同様の労働力供給地となった。高度成長期の「労働力の南下現象」が進み、北海道も新規学卒労働者を中心に大量に流出した（奥田 1998、378）。

北海道内の人口移動も大きかった。道内人口は、金の卵と称されて就業者が道内から道外へ流出しただけでなく、第一次産業の斜陽化や主な産業が札幌など道内都市部に集中したことにより農漁村や産炭地から都市部への転出も進んだ。1962年には、道内都市部人口は50%を超え、郡部の過疎地帯は広がった（舟山 2001、31-2）。北海道の農村からの人口流出は、首都圏を中心とした本州から吸引されると同時に地域の中核都市や中心小都市に吸引された。たとえば1970年の1年間で北海道から道外への転出は8万人と多く、そのうち4万人の転出元は札幌市以外の道内市部、3.3万人は郡部からであった。さらに道内移動として、1.6万人が郡部から札幌市へ、2.3万人がそれ以外の市部へ流出している（奥田 1998、380-1）。

このような文化的な多様性と人口流入の大きな変動、そして結果的に発生した地域格差は、北海道の地域統合を困難にさせたであろう。他地域にみられるような、共通の歴史や確認不要の共通の文化はなく、ローカル・アイデンティティをもちにくい状況にあった。

4.2 中央との関係

北海道には、ある政策のために国家によって強く介入されるが、次にはその政策の転換のために突き放されるという、中央に振り回されてきた歴史がある。

明治政府のもと、北海道開拓は軍事的要請（帝政プロシア南下に対する）と殖産興業政策の一環（土地開拓政策と移民政策）として行わる。当初（1890年以來）は北海道内の諸事業はすべて国費で賄われていたが、早々に自立を促され、北海道地方費（地方税など）が導入されると、財源は北海道内の自然増収に求められた（蛭名 1983、27-42）。

戦時中、海外の植民地を失った日本政府は、北海道を食糧自給や国内の資源開発、人口収容の上から日本経済再建の前線基地として注目した。開発計画も戦前の農業開拓中心から、各種の豊富な未開発資源の開発とその利用に重点がおかれ、北海道開発法にもとづいて実施された総合開発事業には、以後、膨大な事業費が投入され、北海道の産業振興、地域経済と道民生活に大きな影響を与えた(丹治 2001、17)。

前述した人口増減の背景のひとつには農業政策もあった。1960年から1990年の間、北海道の農業は高度成長期に規模拡大通じて主業農家を担い手とした生産性向上を実現してきた。しかし、自由化の進展と、円レートの継続的上昇から対外競争が激化し続け、「ゴール無き拡大」と言われる規模拡大を続けてもなおかつ農業の未来の展望が開けなかったのである。同時に、規模拡大に伴う農家戸数の減少が農村人口の減少をもたらし、その進行によって地域社会の崩壊の危機をもたらした(奥田、379-80)。

こうした歴史をもつ北海道では、地方政府論的⁸地方自治へのアプローチが全国と比べて早めに表面化し、革新的政治風土が形成されていく。田中敏文革新道政(1947年から1959年)下での革新自治体(帯広吉村市長⁸など)の誕生で地方政府論の土壌が築かれた(十亀 1998、508)⁹。

「60年代までは、国と地方の関係が上下関係で処理されることが常態化されてきた」が、「地方自治の理念を出していくと中央政府との間に対立が起こり、抵抗するようになった」。

60年代には保守道政になったが、それでも中央に抵抗するようすをみせる。たとえば山崎によると、開発政策の目標設定をめぐる開発庁と道の関係は中央地方間の考え方の違いとしてみるができるという。開発庁の存在意義は、北海道という一地方の開発を国土開発として行い、開発の成果が日本経済社会全体に寄与するという論理に支え

⁸ 十亀によると「中央・地方関係は上下・支配関係ではなく対等な“地方政府”として、3割自治とは手を切って自立しよう」という「地方政府論」(「中央・地方政府間関係論」)が初めて主張されたという(十亀 1998、508)。

⁹ 帯広市長の言葉「所報」第24号、1971年1月号から引用。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

られていたが¹⁰、他方、自治体としての道の方向性は、地域住民の生活福祉向上を指向していたので、相反する場面を生じることになったという(山崎 2006、6)¹¹。

北海道がもっとも国家にふり回された政策のひとつは、石炭産業である。石炭産業は北海道にとって、「開発」と同時に国からの「支配」であった。「1945年敗戦直後、国内産業復興のための石炭増産が緊急課題になった。傾斜生産方式が採用され、3年後には増産、北海道は全国の27%を生産した(丹治 2001、28-30)」。資源として北海道が国家から熱いまなざしで見られたが、やがてエネルギー政策が転換すると冷たく見捨てられていく。「1960年石油輸入が自由化されると、「石油全面依存」政策に転換、石炭生産は「漸次的撤退」政策が開始され、石炭産業は全面的崩壊の危機にいたる。1966年には日本炭鉱労働組合が石炭政策転換闘争を展開したが、炭鉱労働者数は7万8千人(1957年)が1万4千人(1976年)に減少した(丹治 2001、28-30)」。それでも石炭産業ではたびたび痛ましい事故があった。たとえば、心臓移植(以後、固有の例を指すときには和田移植と呼ぶ)と同時期にも平和鉱で火災(7月)が発生した。この火災は、31人が生き埋めになったが、9人の遺体を収容した時点で、火災による二次災害を防ぐためとして坑内に注水、22人の被災者ごと坑内を「水封」しなければならなかった¹²。

北海道議会には石炭対策特別委員会が置かれ、閉山後の地域経済の深刻な状況について危機感をもって議論され、石炭産業の安定と産炭地振興のために機能していた¹³。北海道では度々、中央の支配からの脱却が謳われた。時期的には少し後年になるが、たとえば1971年、住友三山(赤平、歌志内、奔別鉱)のひとつ奔別鉱の閉山通告が出されたとき、現地三笠市では組合員や住民らが市民運動を起こした。湯田議員が道議会¹⁴で緊急質問をすると、中学生の労働組合宛ての嘆願書を読み上げる「閉山はお父さん、お母さんにはもちろん、わたくし達にとっても、まさしく死の宣告なのです」。議員は知事へ要望する「石炭問題は国の政策であるから、地方自治体としては国の方針に従うよりしかたがないという考え方は絶対に捨ててもらいたい」。

¹⁰ ソ連との国境隣接地域として政治的、軍事的に特別な意味をもつとも言われていた(山崎 2006、6)。

¹¹ 白井によると(1992、67-70)、北海道人は歴史的に中央依存体質があり、開発庁は北海道の中央・政府への〈依存体質〉の象徴であるという。

¹² 北海道新聞、1968年8月12日・8月13日朝刊。

¹³ 北海道議会時報第20巻第1号など(1967年)

¹⁴ 1971年第2回定例会、6月30日1号

日本では明治以降、北海道だけでなく「地域」を切り捨てるかたちで発展した中央集権システムのもとで、支配する「中央」と従属する「地方」という図式が生まれてきた。「地方」は長いあいだ「中央」にたいして劣位の体制におかれてきたのである（玉野井 1979、127）。とくに北海道は中央文化からもっとも遠く、文化未熟な新開地として疎外されてきた。地域の問題は、ほとんど主流的な日本歴史には登場しなかった。異質なものの、またはそれほど重要ではないものという認識があった（永井 2007、273）。北海道は「中央から長年無視され、搾取され続け、中央人に〈積年の恨み〉がある」のである（白井 1992、140）。

あるローカルテレビの研究に、北海道のローカルテレビは「北海道」という行政区分に沿って「想像の共同体」形成を意図的に行ってきたという考察がある。「冷戦下の隣国ソ連を意識しながら、官民一体となって、「開発」をキーワードに、生活向上、経済基盤の確立をめざした番組が数多く制作されている。たびたび起こる災害や、東京の采配ひとつで閉鎖されるような脆弱な経済基盤が露呈するたびに、北海道のメディアはそろって地域振興を打ち出してきた。北海道のメディアにとって、地元を活性化させることは明らかな目的であり、そこには、対本州、対中央と言う視点が常に内在していた」（小川 2003）。これは東海地方のローカルテレビとの比較からの考察で、北海道が日本の他地域とは差異があることを示唆している。北海道社会の統合は意識的にしなければ困難であり、だからこそローカル・アイデンティティ創出の必要性があるのではないだろうか。どこかと対立することは自分たちの互いの絆を深める。中央と対立することは、北海道にローカル・アイデンティティをもたせることに作用してきたのではないか。

5 北海道アイデンティティ「開拓精神」

地域の人々はローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティを同時に併せ持つ。地域の特性だからこそローカル・アイデンティティとして機能するのだが、差異を強調するとどうなるのか。地域の人々には、ローカル・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの間でアンビバレントな感情が起こるのではないか。

5.1 「日本」との距離感

北海道の人々は「日本」との距離感を表現する。1905年北海道生まれの小説家伊藤整は初めて本土に旅行したときの違和感を述べている。「ここでの「日本」は二重の意味を持って私たちに迫ってくる、一つは私たちの〈原点〉であるべき「日本」であり、

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

もう一つは、それにもかかわらず私たちには見知らぬ〈異国〉としての「日本」である¹⁵(白井 1992, 14)。北海道人の意識について 1943 年生まれの白井も共感する(白井 1992, 14)。

「内地」に初めて足を踏み入れるとき、全く異質の世界にいる自分を発見し、ショックをうけ、「日本人」という言葉の全く新たな実感と私たちの「道産子」としての自覚、自己発見の契機となるのである。

さらにドイツに旅行したときには、東京や関西にいるよりも「居心地」が良く、自分は日本人ではなく、北海道は日本ではないと考えついたという。そして長い間心の中に宿っていた、〈中央人〉に対するある意味での劣等感が消滅したという(白井 1992, 15-6)。つまり、北海道人はふだん中央に劣等感を持っていて「中央」に行けば違和感を覚えるが、外国に行くと中央を相対化して劣等感を打ち消せるという考えである。

逆に「内地」からのまなざしから距離感を覚えることもある。北海道を舞台とした映画を分析研究した大石は、映画のなかでの北海道は隠喩的に表象されていて北海道自体として扱われないことが多いという。戦後、「日本的なもの」の権威が瓦解したとき、人々の眼差しが「日本離れ」した風土、エキゾチックな風景をもつ北海道に向かい、ロマンあふれる憧れの場所として映画の舞台になったという。北海道そのものに関心が向かわず、風土的に、政治的に日本離れしていて、北欧、アメリカ西部に似ている限りにおいて関心を向けたにすぎず、関心は北海道を通り越して、北欧、アメリカ西部へ向かうという。隠喩的表象自体が北海道そのものに対して侮蔑的であるという(大石 2005)。

前述した白井は地域社会の特性の違いも感じている。中央人は「権威に弱く、権威の偶像・神話を創りたがる」のに対して、「雄大な北海道の自然風土は、世俗的権威にまつわる一切の虚構と神話を無力化する力を秘めている」という(白井 1992, 90)。白井は北海道社会には、場による集団帰属意識が薄く、よそ者意識があまりないことなどから、社会人類学者の中根千枝(中根 1967)が指摘した日本社会の「タテ」(序列意識)思考から脱しようという(白井 1992, 161)。辺境であることによる劣等感を逆手にとって誇ろうとしている。差異を強調するとき、その差異によってその地域がナショナルな

¹⁵ 伊藤整『故郷の風土』、白井から引用。

ものより劣等であると信じられている場合、地域の人々は葛藤を抱えてもすぐに、劣等感を逆転できる方法を見つける。

5.2 開拓精神、開拓 100 周年、札幌オリンピック

心臓移植が行われたときの北海道は、開拓して 100 年という記念すべき年であった。議会では「開拓精神」という言説がしばしば使われた。1967 年 12 月 16 日第 4 回北海道議会では、自民党佐々木(豊)議員から開拓者魂浸透のための一大啓蒙運動を展開する見解が表明された¹⁶(図 3)。そして 1968 年 2 月 26 日第 1 回定例道議会の知事道政執行方針で、「開拓精神」は次のように使用されている¹⁷。

すべての青少年が、祖国愛と開拓精神に燃え、使命感に徹した道民としてたくましく成長することが肝要と存じます。

さらに、1969 年 2 月 25 日第 1 回定例道議会での知事道政執行方針では、北海道が第 2 世紀を迎えたことに関連し、「開拓精神」は次のように使用された¹⁸。

郷土北海道は、先人のたゆまぬ努力により、100 年のきびしい風雪に耐え抜いてめざましい発展を続け、ここに第 2 世紀という新たな歴史的段階を迎えました。・・・新時代にふさわしい道政を積極的に推進してまいる決意であります。道民の皆さんも、かつて先人が示したあの不屈の開拓精神に思いをいたし、自主独立の精神を培う、偉大な北海道の建設のため、懸命の努力を重ねられることを念願してやまないであります。

¹⁶ 北海道議会時報第 20 巻第 1 号、6 頁

¹⁷ 北海道議会時報第 20 巻第 3・4 号、13 頁

¹⁸ 北海道議会時報第 21 巻第 4 号、4・5 頁

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

北海道議會時報

特集 第4回定例道議会

第20巻 第1号



北海道議会事務局

図 3 100年記念祭のシンボルマーク

「開拓精神」は北海道のローカル・アイデンティティといえる。ところで米国でも「フロンティア精神」はナショナル・アイデンティティのような機能を果たしているが、北海道と米国の共通点は何だろうか。「フロンティア」はアメリカ人が新自由地を求めて西部へ移動するという地理的な意味ではあるが、地理的なフロンティアが消滅したあとも、アメリカ人の心の中に存在し続け、原動力になったという(大橋、53-4)。古矢は、米国の国家形成がヨーロッパとは異なる点を述べている。①国民国家としての米国には、政治的単位の人的土台となる民族的単位が欠けている。②特定の民族や人種や土地に立脚する求心的なナショナリズムを欠く、③思想的基盤を中立的にしたため、米国は「理念国家」となった(古矢 2002, v-vii)。つまり人々の紐帯が民族のような具体的なものでないとき、紐帯は抽象的・理念的なものにならざるをえない。「フロンティア精神」という抽象的概念は米国のナショナル・アイデンティティとして機能してきた。米国と北海道では、国家と地方と次元は違うものの、米国の社会・文化の特色は北海道を考察

するにあたって参考になる。北海道は歴史浅く、混合文化の地であるために固有の伝統を語ることが困難である。北海道も米国と同様に、抽象的・理念的な概念にローカル・アイデンティティを見い出したのではないだろうか。

北海道が米国と近似しているのは歴史的関係性からも言えるかもしれない。「明治初めの開拓期において、北海道はその開発モデルを米国に求めて産業や教育をはじめ多くの分野で多数のアメリカ人指導者を招いた。かれらを媒介に、北海道と米国の間には単に技術や知識の伝達だけにとどまらない稠密な関係が形成され、日本の中では独特な眼差しをもって米国を見つめることになった(札幌学院大学人文学部 1993: iv)」。北海道の人々が「開拓精神」と言うとき、自己像を米国と重ねているのかもしれない。

近似は近年もみられるようである。Kitayama は米国学生、北海道生まれの学生、本州の学生の「自立性」を比較し、北海道生まれの学生が本州の学生よりも米国に近いことを論述している(Kitayama 2006)。

心臓移植が行われた当時は、札幌オリンピック誘致が決定したころでもあった。オリンピックはナショナル・プライドを高めナショナル・アイデンティティを創出する機能があるが、それを自分たちの地域で行えることはローカル・プライドを高めることになる。1966年4月26日、第64次国際オリンピック委員会総会(ローマ)が、1972年冬季大会を札幌に決定した。札幌は喜びにわき、市電・市バスは日の丸と五輪の小旗をかかかって走った¹⁹。北海道新聞には「喜びのマチの声」として札幌市内のある主婦のコメントが紹介されている「本道の若者たちはすばらしい夢を持ち、そして大会では二度と味わえない感動を肌で感じとることでしょう。道路、交通機関、大会を含めて、外国からやってくるたくさんのお客さんに恥ずかしくないまちづくりに全力をあげてほしい。私たちもできる限りの協力をしたい」²⁰。北海道新聞は特集「札幌にオリンピックがやってくる」を連載した「半世紀に及ぶ道民の夢が、ついに開花する」²¹。主会場になる真駒内が「北海道開拓の父、エドウィン・ダン(Edwin Dun)のゆかりの地」であるため、オリンピックと北海道のフロンティア精神とを重ねた「選手たちの記録への挑戦とフロンティア・スピリットは一脈あい通じるものがある」²²。

¹⁹ 北海道新聞、1966年4月27日夕刊、「あふれる五輪ムード」

²⁰ 北海道新聞、1966年4月27日朝刊、「“夢”やっど現実には：札幌オリンピック」

²¹ 北海道新聞、1966年4月27日夕刊、「札幌にオリンピックがやってくる①」

²² 北海道新聞、1966年4月28日夕刊、「札幌にオリンピックがやってくる②」

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

並行して北海道百年記念事業も進んでいた。北海道議会では1967年7月、北海道百年記念事業のための特別委員会設置が議決された²³。北海道大博覧会、北海道百年記念公園の造成、100m記念塔の建設、北海道百年記念式典などが計画された²⁴。この式典は1968年9月2日(和田移植の25日後)、天皇・皇后両陛下がご臨席のもと挙行されているが、この決議において北海道議会では以下のように懇請された²⁵。

北海道が、今日のように、国民経済の発展に重要な位置を占めるに至ったことは、過去百年にわたり、風雪に耐え、開発を進めてきた先人の労苦のたまものであり、今後一層、開発を推進することにより、さらに高い役割りを果たすことは、われわれ道民の責務であると痛感している。

この機会に、北海道百年の偉業をしのび、開発に尽くした人々に対し、慰霊感謝の意を表するとともに、今後における本道開発の誓いを新たにするために、昭和43年9月2日に全道民ごぞつて、北海道百年記念式典を挙行することとなった次第である。

よつて本式典を、厳肅盛大に、かつ、意義深く、執り行つたため、本式典に、親しく、天皇、皇后両陛下の御臨幸をたまわつよう、本会議の決議をもつて、請願する。

「開拓精神」は未開の土地を切り開くという力強さをイメージする一方、辺境である北海道の劣等意識を逆手にとつたレトリックといえる。北海道民が希望をもつて未来を見つめ、心は「開拓精神」で束ねられていた。そしてそれに対してナショナルな承認を求めていた。これをローカル・アイデンティティとすることで、北海道社会は統合され、厳しい自然と中央との闘いを生き抜いてきたのではないだろうか。

²³ 北海道議会時報第19巻第7・8号、22頁

²⁴ 北海道議会時報第19巻第9号、6頁

²⁵ 北海道議会時報第19巻第10・11号、16頁

6 ローカル・プライドとしての心臓移植

北海道で行われた心臓移植は、当初はナショナル・プライドかつローカル・プライドとして受け止められていた。厚生大臣の称賛は冒頭で記述したが、同じ北海タイムスの『心臓移植：和田グループの記録』の巻頭には北海道知事町村金五の称賛もある「北海道の開拓者精神を、医の実践によって示したもの・・・人類に対する偉大な功績として讃えたい」（北海タイムス社編 1968, 序文）。北海道新聞では、「よくやった札幌大心臓外科陣」²⁶と称え、翌日には「・・・全国民から『信夫くんがんばれ』のはげましが集中した。日本医学界にとって新しい夜明けとなった」と興奮を伝えている。ある有力者は、心臓移植を「日本創世記以来の初手術」とし、ドナーの両親の決心について「耐えがたきを耐えた」決心に賛嘆したという²⁷。また、日本でも臓器を提供したいと名乗りを上げた人が存在した。東京都の65才男性が「心臓移植はいいこと、死んだら私の心臓を差し上げたい。日本にも心臓銀行をつくるべきです」と申し出ている²⁸。申し出は全国から寄せられるようになり、8月22日には12人になった²⁹。札幌市在住の詩人は心臓移植を「本当の意味の血の交流」とし、ドナー側の遺族を「心をこめてたえたい」と新聞上で語っていた³⁰。また、東京在住の眼科医は札幌を訪問し、心臓移植をテーマにした絵画を和田に贈り、外科医たちを激励した³¹。日本初の心臓移植は日本中の関心を集め、協力的なまなざしが向けられていた。

心臓移植は日本発の外科学術ではないが、それでも欧米に肩を並べ、高度な医学水準に達したと考えることは、戦争での日本の悪しき自己イメージを払拭し、日本国民に自信を取り戻させ、ナショナル・プライドとみなされたであろう。和田の手術後すぐに出版された本に、大宅壮一が序文を捧げている(和田 1968b, 序文)。

²⁶ 北海道新聞、1968年8月8日夕刊。

²⁷ 北海道新聞、1968年8月22日朝刊、山本武雄・釧路保護司連合会長「朝の食卓：信夫君ががんばれ」。

²⁸ 北海道新聞、1968年8月15日朝刊、「私の心臓、預託します」。

²⁹ 北海道新聞、1968年8月22日朝刊、「預託者さらに5人」。

³⁰ 北海道新聞、1968年8月19日夕刊、津田遥子「随想：心臓移植」。

³¹ 北海道新聞、1968年8月20日夕刊、「心をこめた心臓移植の絵」。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

日本で第一回の手術が東京や大阪の大学ではなく、札幌医大で行われたということに、私は大きな意義を見出し、北海道にはまだフロンティア精神の生きていることを知った。

第2節で筆者は、オリンピック選手を例に、ナショナル・プライドを高めるとローカル・プライドを高めることになる場合があると前述したが、「日本の医学水準の高さを内外にしめした」としてナショナル・プライドを高めたから、そして日本初の偉業を北海道でなしとげたから、北海道の心臓移植はローカル・プライドを高めたと称賛された。北海道の人々が偉業を誇る時、偉業は「開拓精神」と結びつけられ、互いにローカル・アイデンティティを確認していた。

6.1 劣等感からのモチベーション

外科医和田が心臓移植を行おうとしたモチベーションに、北海道が辺境であることは影響していたようである。和田は「地方の医学学校では、何かしないと注目してもらえない」とぼやいていたという。「日本初」、「世界に先駆け」、札幌の教育記者クラブには、和田から新しい手術や実験について会見したいという電話がよくかかってきたという（共同通信社社会部 1998、19-20）。

当時の日本の医学界は、東京大学がリードし、ほかの大学が後続するという構造にある（中井 2010、54-5）。医学教育の学校として、日本で最初に設立された東京大学（1877年）は、新設の医学部の教員を多く輩出してきた。教授に赴任した先で衛星医局が形成されることも多い。数多くの大学の教授が東京大学から輩出され、医学界は東京大学を頂点とした階層構造になっていた³²。

他方、札幌医大は地方運営の「道立」である。日本の中央集権構造のもと、中央に支配されていた国立大学とは異なる存在であった。札幌医科大学は前身の道立女子医専から、新設医科大学の日本第1号として昭和25年（1950年）2月に発足した。札幌医大の使命と建学の精神は「医学の進歩発展に寄与すること」はもとより、北海道の保健医療を

³² ただし、心臓外科に関してはこの前提は若干ずれ、東京女子医大がもっとも先進的であった（教授の榎原氏は東京大学出身で、教授になる前は東大外科に所属していた）。

担う優秀な医師の養成を目的としている」である(札幌医科大学開学 50 年(創基 55 年史)編集委員会編(以下、開学編とす) 2001、19-20)。

それでも心臓外科手術件数について言えば、当時の日本の心臓外科では、東京女子医大の榊原³³と並ぶ二大巨頭といってもよいかもしれない。1967 年の直視下心内手術例数は東京女子医大(榊原)が 1924 例、札幌医大が 1377 例、東京大学(木本)718 例であった。人工弁移植では札幌医大 204 例、東京女子医大 72 例、東京大学 45 例、という統計が示している(和田 1992, 97)。他にも人工心肺の開発・実用化(1961 年)、高圧酸素タンク³⁴の作成(1964 年)、和田弁の開発(1966 年)と、和田の日本の心臓外科への貢献は大きかった。

しかし心臓移植に関して当時の札幌医大は完全にダークホースであった。たとえば、1955 年の『文部省科学研究費による総合研究報告集録』には、「心臓外科」研究が報告されている。ここでの研究グループは東京大学、大阪大学、東京女子医大、慶應大学などであった(日本学術振興会 1955)。また、日本移植学会は 1965 年に設立されたが、1967 年までの 3 回の総会で心臓移植に関する報告は、東大胸部外科、東大分院外科、東邦大学第一外科、岡山大学第二外科、東京女子医大心研などからであり、札幌医大の報告はほとんどなかった。

外科医和田のモチベーションは劣等感から、つまり北海道という地方であるがゆえに沸き起こっていた。

6.2 ナショナルな承認を失う

ローカル・プライドを強調するときは、地域の人々がナショナルな承認を求めることが予想できるが、中央は素直に承認するのだろうか。

1960 年代の北海道は、石炭政策や農業政策などの国家の政策に翻弄されていたが、革新道政のもと中央に抵抗していた。さらに、歴史が浅いことや北端に存在することがか

³³ 東京女子医大心臓外科教授、鑑定人のひとり。

³⁴ 道内の釧山ではしばしば悲惨な事故が発生した。戦後の夕張炭鉱だけでも、1960 年第二鉱爆発(死者 42 人)、1965 年、第一鉱爆発(死者 62 人)、そして和田移植と同時期にも平和炭で火災(7 月)が発生した。このため札幌医大には日本で初めて高圧酸素室が設置され、炭鉱でのガス中毒の被災者の治療のために使用された。それがさらに和田の心臓外科医としての発想から、高圧酸素手術室が設計され設置されたのである。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

ら、辺境、文化の遅れのような蔑むまなごしを中央から受け、北海道は自信をもてるなにかを必要としていたであろう。

本節ではメディアの記事論調における、北海道と全国の違いについて分析する。私達が知っている和田移植は、全国新聞の報道記事などの情報源に拠っているが、その歴史認識は北海道と必ずしも同じではないかもしれない。対称的な新聞記事をいくつか紹介する。

刑事告発後、和田の同僚、札幌医大第二内科の宮原光夫が、レシピエントに心臓移植の適応はなかったと論文上³⁵で批判すると、それを全国紙の朝日新聞が記事にした³⁶。翌日北海道新聞もこれについて記事を掲載したが、この論文に関する和田の反論を載せていた³⁷。この翌年、もう一人の同僚、病理学の藤本は論文上で、「病巣は僧帽弁だけであり、レシピエントに心臓移植の適応はなかった。・・・心臓外科医の功名心から実施されてはならない(藤本 1970)」と強烈な批判を展開すると、やはり朝日新聞はこれを紹介した³⁸。全国の読者には、和田が功名心のために心臓移植を行った犯罪者であるかのように印象づけられたであろう。

1969年9月、世界初の心臓移植を行った南アフリカの外科医バーナード(Christiaan Neethling Barnard³⁹)が文化使節として来日した。東京と北海道を訪れ、和田とともに記者会見を行っているが、全国紙と北海道紙とのギャップがもっとも顕著だったのはこの内容である。

朝日新聞は東京本社にバーナードと和田を呼んで座談会形式の取材を行っている。二人をわざわざ招いていながら朝日新聞の記者の質問は挑発的であった。たとえば朝日新聞はバーナードに、健康にならなければ手術は成功とはいえないと言わんばかりに言うのと、バーナードは「健康な生活に戻らなければ手術が成功ではないという見方には反対だ」とやり返す。朝日新聞は和田を目の前にして「和田教授は告発されたが」、バーナードには「どんな風当りがあったか」と質問すると、「新しいものに偏見をもつのは人

³⁵ レシピエントを診療していた宮原は、外科で紹介したのは弁置換術のためであり、僧帽弁だけが侵されている患者に心臓移植の適応はなかったと主張した(宮原 1969)。

³⁶ 朝日新聞、1969年4月26日朝刊、「移植の必要なかった」。

³⁷ 北海道新聞、1969年4月27日朝刊、「”移植、必要なかった”」。

³⁸ 朝日新聞、1970年5月12日朝刊、「心臓移植すべきでなかった」。

³⁹ 1922年生まれ、アフリカーナー、ケープタウン大学卒業、1955-1958年に米国ミネソタ大学に留学、グルーテスキュール病院心臓外科教授。

間性の常だ。医師というものは、自分の行為に責任を持ち、良心がはっきりしていればそれでよいと思う」とまたやり返された。逆にバーナードは朝日新聞の記者に質問する「移植手術の決断とそれ以前の一般的手術の決断と異質だと思うか」。朝日新聞が「チャンスを狙っていたはずだ。誘惑があったはずだ（心臓移植が偉業であったことを前提にしている）」と挑発するとバーナードは、「心臓移植で人々が騒ぐのは、対象がハート(心臓)なので、純粹に科学的に考えることがむずかしいからだ」と記者をあしらった。このときは、術後長期生存例であったブライバークが死亡した直後であった。朝日新聞記者はこのレシピエントを「心臓移植のシンボル」と勝手に呼び、バーナードに「希望者が減って困るのではないか」と嫌味を言うとバーナードは、「そういう目で見ると人たちは、健康な心臓の持ち主だから」とやり返し、「移植によって生き延びる光明がある以上、私は希望者が減るとは思わない」と忍耐強く答えた⁴⁰。

3日後、北海道新聞はバーナードの講演内容の要旨を載せ、彼を「未知の分野に切り込む開拓者」とイメージし、「この開拓者にも「神の部分」があることを示しているのかもしれない」と好意的にとらえている。「開拓者」という表現は北海道の開拓の歴史を重ねているのだろう。バーナードのコメントとして、心臓移植の適応、バーナードの死の判定に関する持論、バーナードの和田への賛辞をそのまま載せ、「心臓移植が確立されれば、アメリカだけで五百万人の人たちを助けることができる。心臓移植はいま始まったばかり」という希望に満ちた結び方をしている⁴¹。

北海道新聞は心臓移植への夢を捨てない。1970年1月の北海道新聞では、心臓移植についての米国の調査報告が「継続する価値がある」と結論していることを、「“心臓移植は続けよ”」という記事にしている⁴²。

中央と対立しながら、その相手にナショナルな承認を求めることはアンビバレントなことである。1970年9月、和田の不起訴が決定された。朝日新聞の記者が北海道の人々に取材したところ、彼らの反応は記者にとって期待はずれのものであった。

⁴⁰ 朝日新聞、1969年9月26日、「心臓移植は続けたい：バーナード、和田両博士語る」。

⁴¹ 北海道新聞、1969年9月29日朝刊、「心臓移植のバーナード博士来道」。

⁴² 北海道新聞、1970年1月7日朝刊、「“心臓移植は続けよ”米医師陣が調査報告」。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

北海道には、なおも和田教授を支持し、擁護する人は多い。しかしその大半は「日本で一番目に心臓移植をした医師が北海道にいることを誇りに思うから」という、単純な地元びいきの人たちである⁴³。

朝日新聞が全国新聞を代表しているわけではないし、新聞が人々の声を網羅できているともかぎらないので、この分析だけで北海道の人々の考えとして結論することはできない。しかし、たとえナショナル・プライドから産出されたローカル・プライドであっても、ナショナルな承認を失ったからといってローカル・プライドを即座に捨てられない場合があるということは言えるのではないだろうか。特に中央と対立しているときはそうなのではないか。

歴史解釈は地域のアイデンティティに関わるものである。当該札幌医大での心臓移植の歴史解釈を『札幌医大の50年史』から参照すると、大変な騒ぎになったことと、学内から反論があり議論が分かれたことが述べられ⁴⁴、誇ることも恥じることもできない紹介になっている（開学編 2001、44）。北海道新聞社は特集『北海道の20世紀』で「和田心臓移植」を紹介しているが、端的に事実だけが述べられている（北海道新聞社 1999、242-3）。北海道庁のホームページには、道史略年表⁴⁵に記載があるのみで、歴史解釈は見い出せない。現在はローカル・プライドではなくなっているようである。

終わりに

北海道の心臓移植の例から、ローカル・プライドとナショナル・プライドの関係性について考察した。

当時の中央集権構造の日本で北海道は中央から劣位におかれていたが、中央への対立、開拓100周年、札幌オリンピック計画などを通して北海道の人々はローカル・アイデンティティをもつようになっていた。歴史が浅く、共通の文化をもたない北海道では、抽象的概念「開拓精神」は垂直的にも水平的にも地域の人々の心を束ねた。このとき日本初の心臓移植が北海道で行われたことは、北海道の人々のローカル・プライドを高め

⁴³ 朝日新聞、1970年9月3日朝刊、「心臓移植不起訴のあとに上 いぜん多い和田支持」。

⁴⁴ 正確には、藤本と布施は和田側と対和田側に分かれたのが、それは異なる論点だった。

⁴⁵ <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/hokkaido-shi/yushikisya/03/shiryo11.pdf>, 2018年1月28日DL。

ることになった。しかし一度はナショナル・プライドを高めた心臓移植であったが、刑事告発など批判が高まりナショナルな承認を失っていった。それでもローカル・プライドを高めた対象がナショナル・プライドではなくなったからといって、ただちにローカル・プライドではなくなるとは限らなかった。

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

文献

- 安達智史 2010: 「ブリティッシュネスの解体と再想像: ポスト権限移譲におけるナショナルおよびサブナショナル・アイデンティティ」 社会学年報 39: 51-62.
- アンダーソン, B. 2007: 白石隆, 白石さや訳『定本 想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山; Anderson, B. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983.
- Armstrong G. and Hognestad H. 2003: “We’re not from Norway”: football and civic pride in Bergen, Norway” *Identities: Global Studies in Culture and Power*, 10: 451-75.
- 伊藤香織 2017: 「都市環境はいかにシビックプライドを高めるか: 今治市を事例とした実証分析」 都市計画論文集 52(3): 1268-75.
- 蛭名賢造 1983: 『北海道拓殖・開発経済論』新評論.
- 藤本輝夫 1970: 「病理学から見た心移植の適応: 循環動態との関連を中心に」『最新医学』25(5): 1137-46.
- 舟山直治 2001: 「高度経済成長と道民生活」北海道開拓記念館『戦後の北海道: 新しい北海道(常設展示解説書 7・8)』北海道開拓記念館.
- 北海道新聞社編 1999: 『北海道の20世紀』北海道新聞社.
- 北海タイムス社編 1968: 『心臓移植: 和田グループの記録』誠文堂新光社.
- 古矢旬 2002: 『アメリカニズム 「普遍国家」のナショナリズム』東京大学出版会.
- Kitayam S 2006: “Voluntary settlement and the spirit of independence: Evidence from Japan’s “Northern Frontier” ” *Journal of Personality and Social Psychology*, 91(3): 369-84.
- 共同通信社社会部編 1998: 『凍れる心臓』共同通信社.
- 宮原光夫 1969: 「心臓移植時における生死の判定」『内科』23: 850-3.
- 永井秀夫 2007: 『日本の近代化と北海道』北海道大学出版会.
- 中井久夫 2010: 『日本の医者』日本評論社.
- 中谷猛 2000: 「「ナショナル・アイデンティティ」の概念に関する問題整理: 国民国家論研究のためのノート」『立命館法学』271・272(下巻): 1301-2.
- 中谷猛 2003: 「「ナショナル・アイデンティティとは何か」中谷猛ほか編『ナショナル・アイデンティティ論の現在: 現代世界を読み解くために』晃洋書房.

- 中根千枝 1967: 『タテ社会の人間関係』 講談社.
- 日本学術振興会編 1955: 『昭和 29 年度文部省科学研究費による総合研究報告集録: 医学及び薬学編』 日本学術振興会.
- 野崎剛毅 2012: 「アイヌの血統とアイデンティティ」 北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : *Ainu Report 1*: 19-26.
- 小川明子 2003: 「再考: テレビとローカル・アイデンティティ: 東海地方を例に」 愛知淑徳大学現代社会学部論集 (8): 1-18.
- 大橋健三郎 1969: 「フロンティアとアメリカ精神」 大橋健三郎編『講座アメリカの文化 2 フロンティアの意味』 南雲堂.
- 奥田仁 1998: 「北海道経済の到達点と課題」 北海学園大学開発研究所編『北海道開発の視点・論点』 北海学園大学開発研究所.
- Ogawa, R. 2013: “Imaging regional national and local identities: ‘Asianism’ in Fukuoka” Cobbing, A. ed., *Hakata: the cultural worlds of northern Kyushu*, Leiden: Brill.
- 大堀研 2010: 「ローカル・アイデンティティの複合性: 概念の使用法に関する検討」『社会科学研究』 61(5・6): 143-58.
- 大石和久 2005: 「北海道と映画: 北海道の表象とそのアイデンティティ」『開発論集』(75): 49-63.
- 小内透、長田直美 2012: 「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」 北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : *Ainu Report 2*: 169-81.
- 札幌学院大学人文学部 1993: 『北海道とアメリカ』 札幌学院大学学生生活協同組合
札幌医科大学開学 50 年(創基 55 年史)編集委員会編 2001: 『札幌医科大学開学 50 年・創基 55 年史』 札幌医科大学.
- 札幌医科大学胸部外科編 1984: 『二十五年の歩み』 札幌医科大学胸部外科
笹森秀雄 1987: 「現代社会構造の中の北海道」 北海道大学放送教育委員会編『文化としての北』 北海道大学図書刊行会.
- 白井暢明 1992: 『くたばれ! 「東京神話」: わが熱愛的北海道論』 北海道新聞社
玉野井芳郎 1979: 『地域主義の思想』 農村漁村文化協会.
- 田辺俊介 2010: 『ナショナル・アイデンティティの国際比較』 慶応義塾大学出版会.
丹治輝一 2001: 「産業の転換」 北海道開拓記念館『戦後の北海道: 新しい北海道(常設展示解説書 7・8)』 北海道開拓記念館.

【論文】「ローカル・プライドとナショナルプライドの緊張関係
：北海道の心臓移植を例に」（小久保亜早子）

十亀昭雄 1998: 「戦後北海道における「地方政府」論議の推移」北海学園大学開発研究所編『北海道開発の視点・論点』北海学園大学開発研究所.

和田寿郎、富田房芳、池田晃治ほか 1968a: 「心臓移植手術の臨床」『日本医事新報』(2325): 3-6.

和田寿郎 1968b: 『ゆるぎなき生命の塔を：信夫君の勇気の遺産を継ぐ』青河書房.

和田寿郎 1992: 『脳死と心臓移植』かんき出版.

和田寿郎 2000: 『ふたつの死からひとつの生命を』道出版.

山崎幹根 2006: 『国土開発の時代』東京大学出版会

安田泰次郎 1941: 『北海道移民政策史』生活社.

米本昌平 1988: 『先端医療革命』中公新書.

